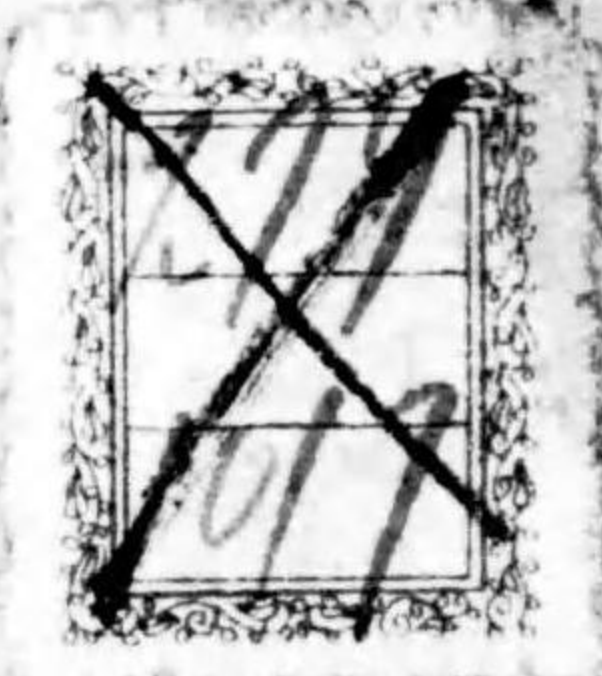




春の平地



特



始



47103
508



詩集

地平の春

橋本實俊著

大正
8. 8 19
内交



自序

私が今、傳習にたよらず規約に制せられずして自ら詩を創め得る所以は、個性の内部生活の創造を以つて直に詩の創造とするからである。私の詩は何ものの再現でもなく捕捉でもなく、新しき創造そのものである。私の詩は如何なる目的をも持つて生れたものでない、一に動機と發展とに依つて生れた。目的は創造の自由性を失はしめる、此

の故に目的に向つて進むことは詩の性質でない、
 動機より出立することが詩の性質である。ここで
 云ふ動機とは感情の激動である、私の詩はこれを
 アプリアオリとして創まる。感情は最も内面的なる
 意識の意識であり、運動を以つて性質とする生命
 の本體である。

詩人は生命自らの自由なる感情を保持せる個性
 である、そして個性とは生命の發展が生める形式
 だ、だから詩人は自己の感情に沈潜することに依
 つて却つて自他の境壁を徹して生命に連り同一體

となる。此の時詩人は眞の歡びを享ける、歡樂と
 は生の躍動を體得する自由輕快な感情の律動を指
 すのだ、若も私が皮相な自己に固執してゐるなら
 ば私の精神は弛緩して死の沈鬱を呈する。私が有
 意無意の間に生計のために泥める知識と意慾を揮
 り棄て、純愛を以つて他と接觸し融合する時には、
 私の精神は一時に爛々たる白熱的光輝を發するの
 である、私が最高の歡びを味ふのは此の時だ。

例へば私が風景に恍惚となる。此の際の歡びは
 風景を愛するからではなくして、愛しつつあるこ

とである。此の時私は風景の内心に透徹するが、忽ち自己に透徹してゐるのである。此の時私は風景に同感し融合してゐる。此の時私は純粹渾一な生命の状態に立ちかへる。私に價值ある純粹生活はかかる場合の感情生活であり、かかる場合から開展せられる感情生活であらねばならぬ。私の詩は實に此の點から最も正しく、且つ自由に開展せられた言葉への生活を表はす。蓋、自由とは矛盾、相殺に依つて勢力を削がれぬ律の揺めきであり、同時に又、個性の純粹生活の唯一の様式である。

5

純愛の歡びを以つて渦巻き起れる感情の律動は恰も波の中心となり、波動は次第に周圍に波及する。此の時私が他の行爲の方面を塞がれたとするか、或は言葉への方面が獨、自由だとするならば、此の波動は狭いながらも言葉への出口を目掛けて押し出すのだ、此の際に於ける心象はエイテルである、感情の波動を傳へる一の媒質に過ぎない、かくして個性の外延の一部と化せる言葉にまで振動は傳はり詩が生れる、だから私の詩は人に傳ふべき意味を持たぬ、作用其のものの中に自らを表

はしたる感情の體現である、私の表現は私の體驗である。

生の律は個々の姿を以つて私の詩に表はれる、律語より成る私の詩は生まれた、個性の創造する内部生活は言葉に達して詩を完成した。

しかし彼の動機より生じた運動は決してこれで終りはせぬ、今後の問題として詩の社會的存在理由が残つてゐる、換言すれば、如何に人性に影響を及ぼすかの、詩の文化價值である。詩の文化價值とは一言に盡せば、却つて功利を離れて而も功

利以上に到達する所にある。功利以上とは何か、即ち社會を形づくる習慣制度の安危を眼中に置かず、個人の生計を保證する知識と意慾を無視して只管、個人の内部生活の解放を味得せしめることである。

そこで、個人を離れて考へると、詩が全く終始なき生命の活動であることに氣づくのである。

大正八年七月一日

著者

地平の春

たぐり寄せ手繰りよせまでも引きとめよ、
嬉しくも水色の絹糸につながれた
子供の時の愁ひを。

ぼんぼんと数限りなく地平を跳ね、
即ち心臓の上を跳ねる、
淡く悲しい歡びを呼び返へせよ。

夜が明けた

卑屈な安心で
悔恨をまぎらさうと
やかましい蛙よ、
さてはあの水に匂へる蛙等よ。
けなげな戀人は
爽かな肉體を持ちながら

下劣頑健な夫のために壓倒され。
ふみにじられ、
地上は重く
空は身をふるはせ
ほっとして夜が明けたぞよ。

成 熟

肉身のをとめよ、
 お前は私の眼を以つて見、
 私はお前のおとがひとなるのだ。
 此の世界は青く、
 おとがひは圓くひとりで黙つてゐる。
 をとめはあるく、
 水のかがやき。

肉身の乙女は
 涼しい空にかなしみのため輝いてゐる。
 乙女のかがやく時節が来たのだ。
 鳩はあこがれのため香氣を放し、
 をとめ、お前も氣をあせり
 匂へる汗を分泌して瘦せやうとする。
 ばら色の朝の太陽。

氣高いをとめよ。

乙女は夜もねられぬために
光りはだんだん冴えて行き、
毎日、自分の肉を喰ひ破り、
盡きない美味と健康とを持てあぐむ時節が来たよ。
一生懸命に鳥がなく時節が来たよ。

をとめは祈り、うめき、
自分の聲にも驚く
その敏感な指を持つ。
光りはをとめの指から出る、

青く、まつさをく。
指の痙攣は無限の悩みを持つ電子を放射し、
世界の夜明けを戦かしてゐる。
ああ、口惜しくも廣がる朝の風。

蛙の魔術

どうとうか弱い夜が来るやうになつたぞ。

蛙はげげげげ、げげげげ。

これでやつと眞珠光澤の夜となる。

打っちやらかせ、本當に

ごこもかしこもである。

實際は此のとほりだ――

戀仲のめすとはぐれ合ひ、

戀仲のめすを奪はれて、

これを見ながら同じ調子で

げげげげと鳴いてゐるのだ。

どうでもいい、無茶苦茶だ。

うなされてゐるのだ。

土百姓の蛙はこんなに鳴いてゐる、

「機會を逃がすな、早く早く」と。

馬鹿らしい何が機會だ。
けれどもこれで寝苦しい夜が続くことになり、
夜毎に少女はおとなになる。
そら又、げげげげ、げげげだ、
眞珠光澤の泣き蟲の夜に。

祭の記憶

多肉多漿で
まんまるな太陽が
西へ西へと
なな色のオオケストラを奏でて、
今は素直に
さっさと行きすぎる。

下界はおまつりで笛がなる。

太鼓がなる。

歌を唱って

からくり眼鏡を覗くと、

土筆の花粉が

ばっばとちり、

鍼力の喇叭もなり出して……………

どやどやと色彩を失ひ、

しかし氣取って

反り身になった小さな一團が

さっさと行きすぎる。

K 君 よ

もういい、もういい、

K 君よ。

悲みはわが胸をさへ崩れさす。

ドドドレ……………ソソソラ……………

海のはてから呼んでゐる

熱情的な高音部。

それだのに頓着なしのつれない海を思ひ知れ。

船は小さくなるに連れて

だんだん明瞭に冴えてくる。

緑の唇をかをらせて聲揚げる娘、

足拍子取つてどこまでも聲あげる

全く取りかへしの付かぬ初めての娘。

音波の振動はスペクトルの紫に達し

サファイヤの金星を泣かしめる。

此の時君は彈奏室に入る。

螢の匂ひ

聰明な六脚のふるへ………
水銀の夜空を込めて、
流れる、流れる、螢の匂ひが。

今こそセンチメンタルの偉丈夫、
健闘婆のおちぶれが始まる、
その薄青い身ぶるひが始まる。

シヨウウキンドウの初夏、
 アスパラガスの蔭にはほ笑む
 プリュウホワイト、
 ニカラットのダイヤに眩惑され、
 幼い肉體を研ぎ澄ます
 螢の匂ひ。
 ああ、水銀の夜空をこめて、
 流れる流れる、螢の匂ひ。
 其の香世界に充ち渡る

色聲香味觸法。

今夜、六月三日、
 アスファルトの歩道の上に、
 悲しき健闘婆の
 おちぶれが始まる。

注、私は幼い頃から嗅覚が人より鋭くあたつので私の父は戯れに私を健闘婆と呼ぶ
 ことがあつた、佛典に依ると健闘婆は唯、諸種の香氣のみ喰ふとある。

こほろぎの遺言

私の胸を撫でおろす手のひらに言はう
力のたるんだやさしい手のひらに。

私の胸はやせ衰へ、

直に夜の更けたのが知れる、

時節の移り目が知れる。

こほろぎがなく、唯ひとつ。

酷たらしくも一夜の間に

友達らは皆斃れ、

恨みを呑んで死に別れ、

ただ一つ生き残った時候の蟲だ。

お腹は瘦せ

びっこになり

美しい聲で鳴いてゐること。

美しい聲だこと。

大阪近郊

郊外は白み渡り、
 はてしもない蘆むらの中では
 今でもかけすが鳴いてゐる。
 郊外は冷然と白い齒で笑ひ、
 幻覺と錯覺とに疲れて
 憂鬱に傾いた都會の跫音に
 藍色のながし目を送る。

聞き馴れた鐘

凡てが滅んだ。
 忽ちダアクチェンヂ。
 此の時、鐘が鳴る。
 戀がたきよ、鐘がなる。
 幽かに、しかしはつきりと。
 お前が生まれた日にも、

私が生まれた日にも、
戀人が生まれた日にも鳴ってた鐘。

戀敵手よ、仲直りだ。

私は落付いた、

お前もおちつけ。

しかし鐘がなる。

くちなしの花がおぼめく夕方と、

お互の明け方の夢判断をふるはせた鐘は、
唯、私達を悔ませ、

も一度、未練を掛けさせ、
そして今を限りの絶望をさすために
呼びかけ、慰めてくれる。

お前を裏切り、私に靡き、

私を離れてあまりに早く………

さうだ、餘りに早く衰へた戀人だった。

凡てがほろんだ、

そして聞き馴れた鐘の聲。

仲直りだ、戀敵手、
お前の左の胸を刺さう、
お前もここを刺せ。

春のたより

今は葉のない杜^ト柏^カの花も
陥り相な黄色い心を、
人目憚らず投げ出して咲くのだろ。
早や年弱の憂ひは
汗じんだ地面を嬉しげに跳ね廻り、
落付いてゐた眼を當もなく迷はせる。

ちつと疲れて来たよ。
 午飯おひるめしの浅瀬あさなのかをりに、
 野と空と、梨地の景色が移つて行き、
 胡笛こふエがなってる。
 Coranは腸が熟れ、指が酸っぱく、
 根かぎり吹き立ててゐるのだろ。

—朝鮮江華島から—

背 信

濡れた眼を持つものよ、
 したたれる戀人。
 お前は海を見ずして海の心を知り、
 遙かにあの夜と灯とを潤ませる。
 お前は私に哺くまれ、
 私の言葉を習ひ、
 そして私はお前の眼をあけた。

だが、お前は今、なりはひのため
そよぐ眼差しを躡る夫に任かせ、
黄金の律ある言葉をもって
沈澱した俗情に節づける。

おお、堪へがたい重苦しき、背信の弟子。
海と夜との教の上に衰へが來よつたな。

寒い市街

肥り切つた不良少年が唱ふ
無遠慮なはやり歌や、
怪しい養賣屋の變な匂ひなど、
實にたまらぬ。

おまけに電車が停電して、
此の夜蘭けに、

神經遲鈍な裸體を露はし、
 ぎっしり立ち列んだ家並みの
 重壓の下から逃れやうと、
 ほのぼのど、あの
 蜜柑の匂ひのする指頭で
 颯り物にされたマンドリンが
 身の行く末を嘆き、
 そして、其の上に
 冴え渡る星空がある。

透 明 な 秋

何故に私はまだここにゐるのか。
 掻き寄せても指の間から逃げる癖に、
 山を登り谷を降り、
 ふり返つて艶めいた品を作るのは
 今も忘れぬ涼しい肌を持つものか。
 秋のことならしぐれが降りもせう、

時雨の中でも氣落ちせずもつと引きずれよ。
 身を磨り減らす沙濱がどこまでも遠く光るぞ。
 見てくれ、私の手は川の様には遙かに伸びて行き、
 指も皆、青く烟り果てたぞ。

それなのに、何故に、私はまだここにゐるのか。

花園の午後

まだもしとやかに振舞ひたいか、
 底の知れぬ残忍な心根をかくして
 テリケイトな聲を見せびらかす女。
 たよたよとした女。

此の晴れた日の午後、
 女が放つ輻射エネルギーに

全身の原形質を昂奮させ勇躍さす
 憐れにも優美な情操を懐く男は
 立派な自分の筋肉にも耻ぢず、
 今や咲き盛つた花の
 雄蕊雌蕊の戯れに泣いてゐる。

其の一生懸命さに引き替へ、
 事もなげに女はただ笑ひ
 蜜槽から露を食らうとする
 傍若無人な細い眼付。

故郷

知らぬまにやつて来た
 猫柳の時節ぢやないか。
 宵の明りに廣がつて行く
 兵營の喇叭ぢやないか。
 消えるばかりなふるさとよ。
 ふるさとよ、

『遠方』は『昔』と一所に和聲を作る。

父は年寄り、母は娘の故郷よ、

ふるさとは母の手箱に残ってゐる赤い珠だし、

としよりの父が唱ふ『濱の松風』だ。

そして竹鐵砲のひびきだ。

世界の終滅

ごうごうなって

くら闇で躍るあらし、

まっくろく降り募る雨。

鐘が鳴り騒ぐ、

火の手が方々に上がる、

つけ火だ、放火だ、

世界最終の嚴かな殺戮！

此の時、私は

ひ乾びた耳鳴りを覚え

たらたらと黄色い汗をしぼり、

只、一人あなたの廐の軒で

びしょ濡れにぬれ

あなたの安否を氣づかってゐる。

温味ある手

温味ある手が來やうとする。

私の掌のうら若いかゆさ。

苔を見ると苔の妄想。

鱗片の中にくるめく妄想。

又、陽炎の踊る日なたに

春の來復を待ちこがれてのた打つ青蛇。

温みある手は冬至線をはなれて
湯氣立ちかすみ
私の乳房に來やうとする。

農夫の秋

はてもなく刈れ刈れ。
人には涙も見せない秋に。

つめたい鎌をあてがってはためらひ、
立ち止まつて歌へ空の深みに。
そして又、刈り出せ氣兼ねして、

笠の中から盗み見ながら、
皆がしをれる、稻穂の重さ。
果もなく刈つて束ねて。

月夜の印象

咽び立つ波間から
麝香性のにほひを
滑かな肢體に漲らして
しつとりとして月が出た。
沙濱のおちつきやう。
空色の船のねむり。

ああ此のよる。

あなたは棚曳き、あなたは明るみ、

再び私は覚えある匂ひを嗅ぐ

如何にもなつかしく

雫するあなたは

黄金の髪を流して

私の耳元でささやき溶ける。

ああ不思議な月の明るさ。

ああ始めてのお互の恐しいけしき。

流れ寄る果物

何か知ら、此の夕暮のやさしい風情に

私の腋に波が打ちよせ、

私の膝に沙がくづれる。

絶へ入るばかりさめざめと果物が、

渚の上げ汐に打ちよせる。

思ひ出しては打ちよせる。

實に鮮かにぬれ

珍しく嘆かす悪い果物よ。

くだものは、

あのおき捨てた水平の空に入り亂れて

願ぎふるへる黄金の細い枝から来たのか、

欺きがたい貧しい心に

唯、一つまざまざと漂つて来た。

夕暮の渚に燃えるくだものよ、

手は早や疼き

唇は焼ける。

うす暗い渚はゆるく松の林に續いてゐて、

幽かに壊れる沙がある、

又、打ちよせる波がある。

あ
を
ぢ

うろたへて取り亂しながら

そこへへたばつたまま

突き出したおとがひは滑かで、

眼はとろみ……

青ちが高い梢で囀る。

夏
の
景
色

ピアノニストが唄い出た單音階のくさり、

又は抒情詩人が憂愁の刷毛で塗つた。

一抹のエメラルドグリーンはあそこにある。

夏は高く響いてゐる。

夏は其の中にうその鳴く聲を籠らしめ、

夏は其の中からむしくひの鳴く聲を流れさす。

みどりは戀人の氣立よりも晴やかに
 しかし何となく泣く聲を呑んでゐる。
 夏は今、太陽のあたりまでも廣がつた。
 見よ、子供らは何事かしゃべり合つては其の
 中でうごめいてゐる。

夏の宵

宵は水銀をたたへるが
 名残惜しく夏もこぼれ散る。
 青い靴下を編む娘は
 出て行く船からふりかへる。
 其の眼の風。
 こぼれちるアカシヤの風。

彼の女の修養時代

朝は早く、夜は晩く、

年は十五、

菜摘み水汲み

歌ふ娘よ。

軟かなハアモニカの時節、

甘く漲る夜は

お前を可愛がり

甘やかせて育て、

お前は堪り兼ねて膏切り

無性生殖の渾沌たる夢に入る。

まことに多産豊饒なお前は

なま温い橙色の刺戟に

著しく向性反応を呈はし

いよいよ熟れ、いよいよしたたり

健氣にも自分の母に代らうとする

抑へがたい叛逆を企てる。

動亂と破廉耻な自暴自棄に
どろどろと曇つた空に響く

祭の夜の太鼓は、

地上に普く瀾漫した

桃色のお前のお腹へこたへ

お前は殆ど昏倒しやうとする。

時が来た、時が来た。

實に夢遊病者のお前は

夜ごとに笑ひ、

夜ごとに狂ひ這ひ廻り、

いつの間によら

忍びの術を會得するいちらしき。

そこでお前は聖まり、

まめやかに私に仕へ

唯一つの神を信じ、

私の呪語を誦んじ。

終には私を裏切り、毒を薦め、
私を喰べて哀別離苦の悲嘆にかき暮れる。

聲

聲は最初に雪の上を橋で滑べる、
ツワイライトの空の響でもある。
素裸で、肉色で、ひらりと早く
音のせぬのは烟のやうに。
後には唯、青と緑のイルミネーション。

(聴く人は皆、海底に電光の魚となり、

只管、未生の新星にあこがれる。

聲は俄かに赤んぼとなり

果敢ない人間の記念品を遺し

早く躍りながらくるくると進む。

(かすかに泣かずにはをられない。)

夏の宵から夜へ

月は強い弾力でたちまち跳ね上つた。

今や宵から夜へ移らうとする。聞け、

無数の小鈴を、冴えまさる夜を。

思想は感覚となり

運動はすべて有機作用となる。

夜は胎児のうごめきを思ふ。

見よ、泣かうとして先づ流れる涙の夜を。
 凡て風景は漸々に溶けて行き、
 星は水球となり
 山は霧となり、
 幽かにふるへてゐる。

蜜 柑

風に亂れる夏のけしき。

緻密でませた縞栗鼠の毛皮。

蜜柑。

絶世の美貌は失明のため傷ついてはゐるが、

お前は其のためかるはづみがおさまり。

吐息をまぎらす淫態さへ上品になつたよ。

蜜柑。

しかしお前の性分に彫りつけた

細い恨みは霜の徑、

望みも茶色の着物着て立ちすくむ。

ああ、みかんだ。

可愛相にも顔をしかめて

心ならずもキスする時に

冷たいまぶたに傳はつてくる其の嘆きと云つ
たら。

停車場で見た女に

なつかしくときめかす

時の生ひ立ち。

私はここでお前に出會ひ

お前をしたふ。

停車場の腰掛に

貧しく垂れ下がら房々と花咲くお前、

私を嘆かす所の美は

開かうとする慾望に惱む

其の笑ひから来る。

お前の眼の残虐、

お前の齒のなさけ。

其の有毒よ、瞬間よ。

實に明日の誘拐を冀ふ幼い花のお前は

燃える花片を惜氣なく風になぶらせ

私に匿れて走り。

そして樂まうとする。

鬼に捕られてゐた神様

一度、鬼にとられてゐなかつた、
つめたい銀の神様は
人間の憐れを知り染められ、
小さな眼を開けて恥かしがり、
暴力をこわがり、
指を喰へて見てゐられた。

獵師は若くいきいきとして
今の行き掛かりの冒険が
神様を瀆し得る
最初の機會であるのも氣附かず、
白晝の闇と嵐の中で怪物を仕止め
昂奮した動悸を抑へ兼ね、
しほしほと立たれた女の神様を見てゐた。
しかしそれからは
この透き通つた神様が

人間の膏汗を好かれ、
 いやな匂ひをお好きになり
 日日おちぶれて行かれるありがたさ、
 神様は可愛い聲を立てて、
 なま温かい人間の子供をお産みになつた。

地平の春終

地平の春目次

地平の春……………一
 夜が明けた……………二
 成熟……………四
 蛙の魔術……………八
 祭の記憶……………一一
 K君よ……………一四
 螢の匂ひ……………一七
 こほろぎの遺言……………二〇
 大阪近郊……………二三

聞き馴れた鐘 三三
 春のたより 二七
 背信 二九
 寒い市街 三一
 透明な秋 三三
 花園の午後 三五
 故郷 三七
 世界の終滅 三九
 温味ある手 四一
 農夫の秋 四三
 月夜の印象 四五

流れよる果物 四七
 あをぢ 五〇
 夏の景色 五一
 夏の宵 五三
 彼の女の修養時代 五五
 聲 五九
 夏の宵から夜へ 六一
 蜜柑 六三
 停車場で見た女に 六五
 鬼に捕られてゐた神様 六八

装幀 糟谷信司

大正八年八月十五日印刷
大正八年八月二十日發行

版權所有

地 平 之 春

定價 郵稅 八錢 拾錢

著者

橋本

實俊

發行者

山添

平作

印刷者

池上

才治郎

東京市本郷區本郷四丁目四番地

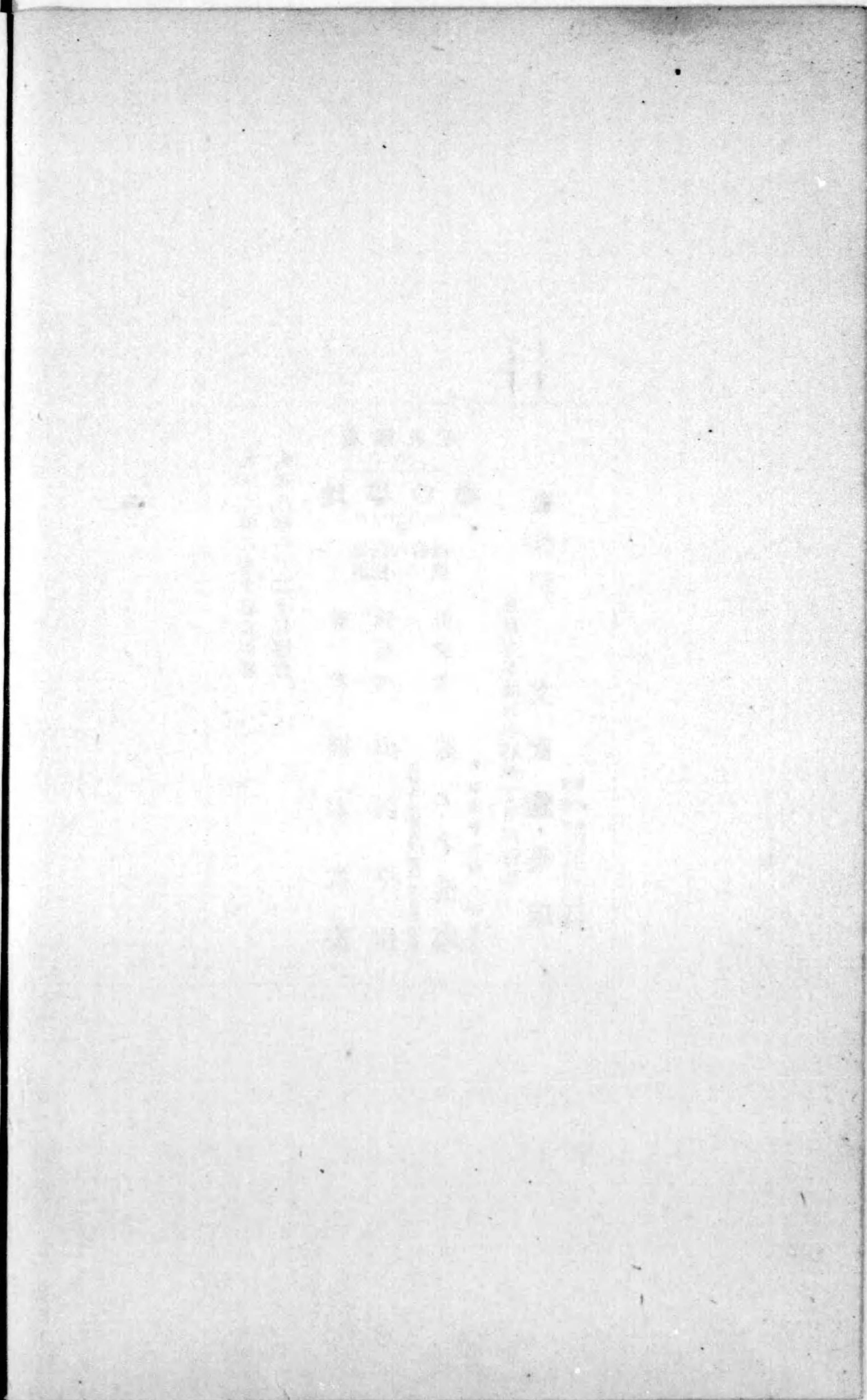
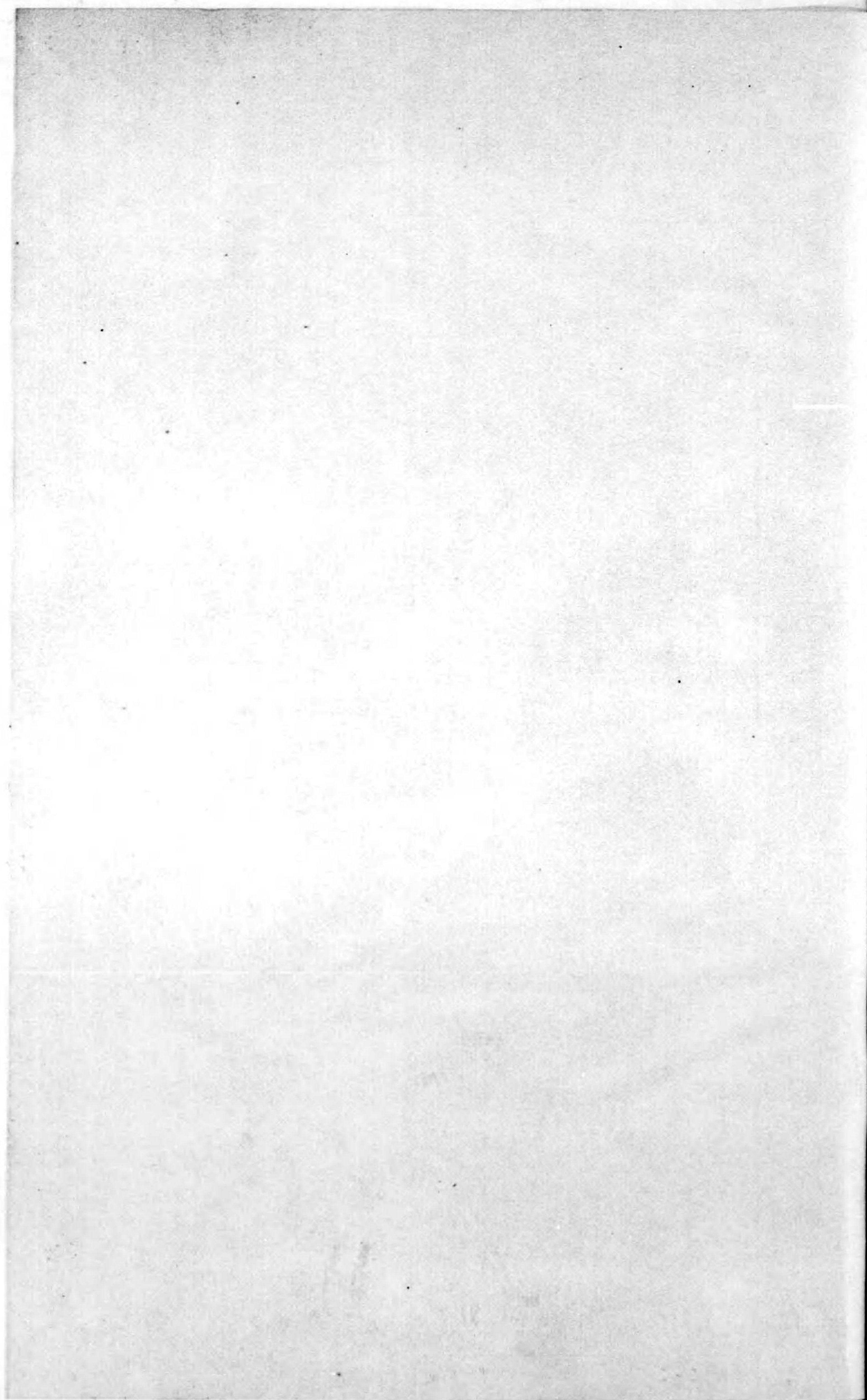
東京市新町通三條北入

東京市本郷區本郷四丁目四番地

發行所

文武堂書店

電話 東京九五三七番
小石川三三七番



179
1017

終

